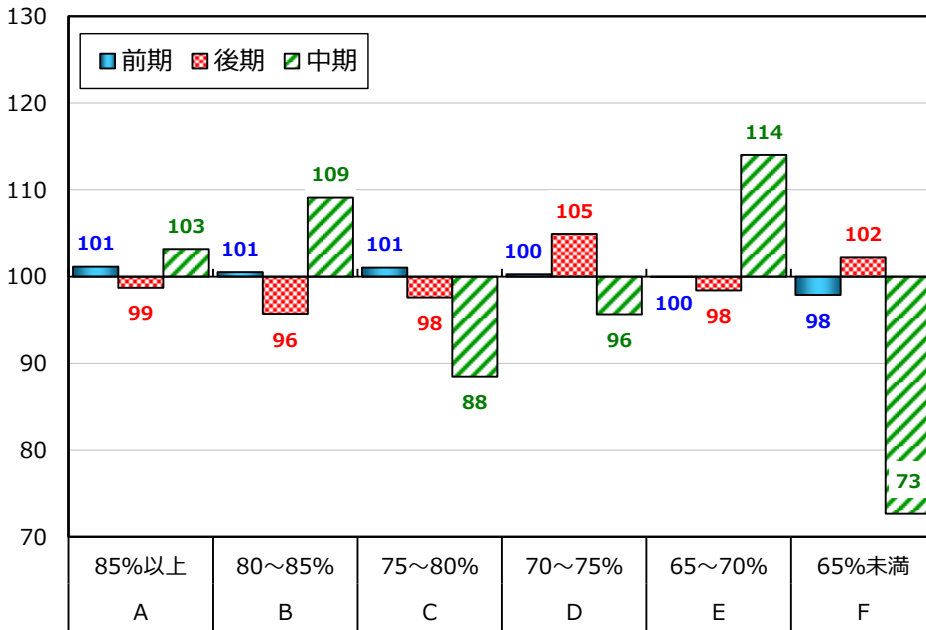


※本文内の（ ）内の数値は志願者数の前年度確定数との対比指数を表します。

◎ 共通テスト目標ライン別志願者数集計

□ 前期は A～C グループが微増、後期は D グループがやや増加



左記のグラフは、2024 年度のデータネット(駿台予備学校／ベネッセコーポレーション主催、共通テスト自己採点集計)において、募集単位ごとに設定された合格目標ライン(B 判定ライン、合格可能性 60%)を基にして、大学・学部(医学部医学科は学科)単位で得点率により6つのグループ分けを行い、日程別に各グループの志願者数の増減を前年度対比指数で示したものです。

前期全体では(100)の前年度並で、A～Cグループが(101)、D・Eグループが(100)、Fグループが(98)

とすべてのグループが前年度並という変化が少ない志望状況でした。共通テストの平均点アップ幅が比較的小さく、得点分布も文理共に得点率 65%以上では前年度と大きな変化がなかったことから、当初の志望どおりの出願がなされたことがうかがえます。

グループごとに詳しく見ていきます。A グループは 297 人(101)の微増で前年度並でした。大学・学部別集計で 100 人以上増加したのは三重大・医(医)、東京大・理科一類、京都大・工、東京大・文科三類でした。三重大・医(医)は奈良県立大・医(医)の教科試験除外の影響で高い人気となりました。一方で、100 人以上減少したのは、東京工業大・情報理工、横浜市立大・国際教養、奈良県立医科大・医(医)でした。東京工業大・情報理工は募集人員が 30%増加しましたが、2 年連続志願者数増加と難易度の高まりから敬遠され大幅減少しました。

B グループは 217 人(101)の微増で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは愛媛大・医(医)、長崎大・医(医)、横浜市立大・国際商でした。一方で、200 人以上減少したのは岐阜大・医(医)、大阪大・基礎工、鳥取大・医(医)でした。岐阜大・医(医)は第 1 段階選抜の基準を約 9 倍→約 3 倍と厳しくしたことで敬遠されました。

C グループは 444 人(101)の微増で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは、大阪公立大・現代システム科学域、都留文科大・教養でした。一方で、200 人以上減少したのは横浜国立大・経済、金沢大・理系一括でした。

D グループは 91 人(100)の微増で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは、横浜市立大・理のみでした。一方で、200 人以上減少したのは、川崎市立看護大・看護、高崎経済大・経済でした。

E グループは 14 人(100)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは、三重大・工、福井大・工でした。一方で、200 人以上減少したのは、富山県立大・工、富山大・理、山口大・教育でした。

F グループは 1,138 人(98)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で 300 人以上増加したのは、鳥取大・工、島根大・生物資源科学、宇都宮大・工でした。一方で、300 人以上減少したのは山陽小野田市立山口東京理科大・工、山口大・工でした。

後期全体では(100)の前年度並で、Aグループ(99)は微減で前年度並、Bグループ(96)はやや減少、C・Eグループ(98)はいずれも微減で前年度並。一方で、Dグループ(105)はやや増加、Fグループ(102)は微増で前年度並でした。共

通テストの平均点アップで目標ラインもアップしたことにより、前期難関大志願者が準難関大へ、地元国立大志望者もより目標ラインが低い大学へという慎重な出願が見られました。

グループごとに詳しく見ていきます。Aグループは 368 人(99)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは山梨大・医(医)、福井大・医(医)といずれも医学部医学科でした。山梨大・医(医)は前年度の志願者数大幅減少の反動と入試科目の変更で外国語を追加して他大学と同様の入試科目にしたことが影響しています。福井大は北陸新幹線の延伸を控えて、関東からの利便性向上も影響しました。一方で、200 人以上減少したのは宮崎大・医(医)、旭川医科大・医(医)とこちらもいずれも医学部医学科でした。

Bグループは 1,059 人(96)のやや減少でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは電気通信大・情報理工のみでした。一方で、200 人以上減少したのは、千葉大・工、横浜国立大・経営、東京都立大・都市環境でした。千葉大・工は(情報工)が改組されたので、これを除くと 42 人(103)のやや増加でした。

Cグループは 737 人(98)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは滋賀大・経済、三重大・人文、富山大・経済でした。一方で、200 人以上減少したのは富山県立大・工、三重大・工、埼玉大・工、静岡大・情報、富山大・都市デザイン、三重大・生物資源で、減少大学・学部が目立ちました。

Dグループは 1,408 人(105)のやや増加でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは福井大・工、香川大・経済、茨城大・工でした。一方で、200 人以上減少した大学はなく、増加大学・学部が目立ちました。

Eグループは 403 人(98)の微減で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは宮崎公立大・人文、島根大・総合理工、島根大・生物資源科学、鳥取大・地域でした。一方で、200 人以上減少したのは山口大・工、滋賀大・教育、石川県立大・生物資源環境、高知工科大・システム工、島根県立大・地域政策でした。

Fグループは 494 人(102)の微増で前年度並でした。大学・学部別集計で 200 人以上増加したのは鳥取大・工、徳島大・理工、北見工業大・工、大分大・経済、秋田県立大・システム科学、秋田大・医(保健)でした。一方で、200 人以上減少したのは室蘭工業大・理工、福島大・理工でした。

公立大のみの中期は、A グループ(103)はやや増加、B グループ(109)、E グループ(114)はいずれも増加しました。一方で、C グループ(88)は減少、D グループ(96)はやや減少、F グループ(73)は大幅減少でした。前期および後期との間で自由に併願が可能な中期では、比較的難易度が高い大学・学部志願者が集まりました。なお、中期はもともと対象大学が少なく募集人員も少ないため、特定大学に志願者が集中しやすく指数が大きく変化する傾向があることから、あくまでも参考としてください。